

童話 幸福の王子様

—— オスカア、ワイルド作 ——



津 田 芳 雄

市街マチの上に高く、高い圓柱の臺の上に、幸福の王子様の像が立つてゐました。像は全身に金が被せてあり、眼は青玉で出来てゐて、刀の柄ツカには大きな紅玉が光つてゐました。

この幸福の王子様は街中の非常な人気者でした。一人の市會議員は王子様の像を見て、「風見カザミのやうに綺麗な方だな」云つて、美術趣味があるさういふ評判を取りたいと思ひました。「唯風見程役に立たないだけだ」彼はまた、非實際的な人間だと思はれては困ると思つてさう附け加へました。事實この人はそんな非實際家ではありませんでした。

「それ！幸福の王子様を御覽。王子様は何も欲しいなんて泣いていらつしやらないでせう」一人のお母さんはかう云つて、お月様を欲しいと云つて泣いてゐる子をなだめ

ました。

「世の中に本當に幸福な人が誰かゐるつてこゝは結構なこゝだ」一人の悲觀した人は、王子様の素晴らしい像を眺め乍ら申しました。

孤兒院の子供達はまた、紅い外套を着て、眞白い洗濯したての前掛をして、お寺から出て來た時、「天使様のやうね」王子様のこゝを申しました。

するゝ算術の先生が「さうしてそんなこゝがわかります？あなた達は天使様なんて見たこゝないでせう？」と申されました。

「だつて、夢で見たんですもの」子供達は答へました。するゝ算術の先生は顔をしかめて、怖い顔をなさいました。子供が夢を見るのはいけないと先生は思つていらつしやる

のでした。

或晩この市街マチに一羽の小さい燕が飛んで参りました。その燕のお友達はまだ六週間前にエジプトの方へ飛んで行つてしまつてゐましたが、この燕だけは、美しい蘆アシを仲好しになつてゐたものですから、自分一人後に残つてゐたのでした。ところが、蘆は自分の家にはかりゐて遠足が出来ません。燕が「僕は旅行が好きだから一緒にお出でよ」と云つても、風にはかり御辭儀をして燕の云ふことを聽いて呉れませんでした。燕はお友達がゐなくなつて淋しくなつたのですから、僕、ピラミッドのある所へ行くよ。さようなら」と云つて飛んで来たのでした。

それから一日中飛んで、この市街に晩着いたのでした。そして「何處マチに泊らうか。市街の人達が用意してゐてくれるだらう」と申しました。それからこの圓柱の上の王子様の像を見附けて、「あそこに泊らう。新しい空氣が一杯あつて好い所だ」と云つて、幸福の王子様の丁度足の間の所に降りました。

「これは金の寢室だ」燕はあたりを見廻し乍ら申しまし

た。そして眠らうしましたが、丁度燕が首を羽の下に入ればようこしてゐた時に、大きな水滴シツクがポタリ落ちかかりました。「あれ、變だな！空には雲一つ無くて、お星様はあんなに輝いてゐるのに雨が降るなんて。ヨーロッパの北の方の天氣つて、こんなものか知ら！蘆は雨が好きだつたけれど、蘆なんて、自分さへ好ければいゝんだ」燕はかう申しました。

それから又一つポタリ落ちました。「雨よけにならないやうだつたら像なんて用は無いや。煙突の笠でも探さう」かう云つて飛び立たうしましたが、羽も擴げきらないうちに又ポタリ。そこで上を向きますと何でせう。幸福の王子様の眼には一杯涙が溜つてゐて、金色の兩の頬を傳つてそれが流れ落ちてゐるのでした。月の光を浴びたそのお顔は大變綺麗でしたので、小さい燕はすつかりお可哀相に思つて、

「あなたはぎなたですか」

「私は幸福の王子です」

「ではさうしてお泣きになつてゐますか？ 私はあなたの涙

でこんなに濡れましたよ。」

するに幸福の王子様が仰有るのでした「僕がね、生きてゐて人間の心を持つてゐた時には涙なんて何のこゝか解らなかつたの。僕はサン、スシの宮(氣樂の宮)に住んでゐたんだもの。そこはね、「悲しいこゝ」は這入れないこゝになつてゐるんだよ。そしてお晝間は僕はお友達にお庭で遊んでゐたし、晩は大廣間のダンスに眞先に立つて踊つてゐたの、お庭の周りには大變高い塀があつたけれどね、僕は一度もその塀の向ふにあるものを尋ねる氣にならなかつたの、あたりに見えるものが何もかも美しいものばかりだつたんだもの。僕の家來達は僕のこゝを幸福の王子様つて言つてゐたよ。そして本當に僕は幸福だつたの、若し楽しい遊びごゝが幸福なのだつたら。さういふやうに僕は幸福に暮して、幸福に死んだ。そしたら僕が死んだといふので、こんな高い所に立たされて、この市街の醜いもの、悲しいこゝが何もかも見えるやうになつたの。だもんで、僕の心臓は鉛で出来てゐるけれど泣かないでゐられないの」

「何だつてー固い金ぢやないか」燕は思ひましたが、流

石に大きい聲で惡口を云ふ程無作法なこゝは致しませんでした。

王子様の像は尙も低い好い聲で申されました「ずつみ、ずつみ向ふの小さい路地にね、貧乏な家が一軒あるの。その家の窓が一つ開いてゐてね、女の人が一人机の前に腰掛けしてゐるのが見えるよ。その人の顔は瘠せてやつれてゐて、手は針に一杯刺されて、荒れて赤くなつてゐるの。その人は裁縫師なんだよ。今、皇后様附の女官の中で、一番綺麗なお方が、今度の舞踏會にお着になる繻子の上衣に、トケイ草の花模様を縫取りしてゐる所だよ。部屋の間つこのベットには小さい男の子が病氣で寝てゐるの。お熱があつて、蜜柑が欲しいつて云つてゐるの。お母さんは河の水より他にやるものがないもんで、その子が泣いてゐるんだよ。燕や、燕、小さい燕、お前、僕の刀の柄から紅玉を取りはづして、あのお母さんの所へ持つて行つてくれないか。僕は足が臺にくつゝゐてゐて、動けないんだから」

するに燕は申しました。「エチプトの方で私を待つてゐるんです。私の友達たちはナイルの河の上をあちこちに飛ん

でゐて、大きな蓮の花に話をしてゐます。やがて大王様の墓場に入つて眠るでせう。大王様もその彩りしたお棺の中に這入つていらつしやいます。大王様は黄ろい麻の布に包まれて、香料がかけられてゐます。お頸には薄緑の硬玉の鎖を掛けていらつしやいます。そしてお手は凋びた木の葉のやうになつてゐます」

王子様はまた「燕や燕、小さい燕、もう一晩だけ僕の所に泊つて呉れないか。そして僕の使をして呉れないか。あの子はとても喉が渴いてゐて、お母さんは本當に悲んでゐるんだ」から仰有いました。

するに燕は「私はさうも男の子は嫌ひなんです。この夏、私が河の上にゐました時、水車場のせがれなんです、腕白な小僧が二人程ゐて、いつも私に石を投げてゐました。勿論當つたことはありませんが。私達燕はそんなへまな飛び方は致しませんから。それに私は特別すばしこいので名高い家柄に生れたんですから。だけれき随分失敬ですな」を申しました。

けれきも、幸福の王子様が大幅悲しさうなお顔をなさい

ましたので、燕はお氣の毒になつてかう申しました。「こゝは随分寒い所ですな。だけれき、もう一晩だけ王子様の所に泊めて戴きます。そしてお使ひを致します」

王子様は「有難う、小さい燕や」を仰有いました。

そこで燕は王子様の刀の柄から紅玉を取りはづして、それを嘴にくはへて、町の屋根の上を飛んでゆきました。

燕は大きなお寺の塔の傍を通りました。そこには白い大理石の天使達が彫られてゐました。燕はまた宮殿の傍を通りました。そしてダンスの音を聞きました。そこへ美しいお嬢さんが露臺の上に出て来て、「いゝお星様だこゝろわたしの衣裳は宮中舞踏會に間に合ふか知ら。トケイサウの縫取りを頼んで置いたんだけき、裁縫師がぐづくしてんだもの」を申しました。

燕は河の上を通りました。そして船の帆柱に燈火アカリがつるしてあるのを見ました。彼はまたユダヤ人街の上を過ぎました。そして年取つたユダヤ人達が取引をし合つて、銅の秤でお金を測り出してゐるのを見ました。それから漸く例の貧乏な家に着いて中を覗き込みました。するに男の子は

熱が高いので頻りにベットの所で寝返りを打つてゐました。そしてお母さんの方はすっかり疲れてしまつて、その側で眠り込んでゐました。そこへ燕はビョン／＼這入つて行つて、持つて来た大きな紅玉を、机の上のお母さんの指ぬきの置いてある側に置きました。それから燕はベットの周りを靜かに飛んで、男の子の額を羽で扇いでやりました。するゝ男の子は「あー涼しい。僕屹度快くなつてゐるよ。」と申しました。そして氣持好さ／＼とに眠りました。

それから燕は幸福の王子様の所へ歸つて、自分のしたことを話しました。そしてかう申しました「變です。ね。だけ／＼こんな寒いのに、私は大變温くなりました」

「それはお前が良いことをしたからなんだよ」王子様は仰有いました。それから小さい燕は考へだしました。そして眠つてしまひました。燕は物を考へるゝ屹度眠くなるのでした。

夜が明けると燕は河へ下りて行つて、水を浴びました。

橋を渡つてゐた鳥類學の學者がそれを見附けて、「これは珍らしいことがあるものだ。冬に燕がゐるなんて！」と申し

ました。そしてその學者は長いそれについての意見を地方新聞に投稿しました。するゝそれが皆の話題になりましたが、その記事はあんまり六ヶしい言葉が一杯ありましたので、普通の人には書いてあることが解りませんでした。

「今夜は私、エチプトへ參ります」燕はかう云つて、喜んでゐました。燕はもうこの市街の名所は皆見物してしまひました。教會の塔の上にも長い／＼まつたのでした。何處へ行つても雀達が囁り合つて、「珍らしい人だな」と申しました。それが燕には大變面白かったです。

お月様が上つた時に、燕は幸福の王子様の所へ戻つて行きました。そして元氣な聲で「エチプトの方へ何かお言附はございませんか。これでお暇致しますが」を申しました。

するゝ王子様はまた「燕や燕、小さい燕、もう一晩だけ僕の所に泊つてくれないか」と仰有いました。